

## CALL教材の対立表現にみる男女差

河内山 有 佐

### 1. はじめに

本研究では、英語のCALL教材における会話ストラテジーとジェンダーの関係を、特に対立表現の使用に焦点を当て調べる。そして、従来会話分析で得られた男女差に関する知見が実際に日本で使用されているCALL教材に応用されているか探る。和洋女子大学では、平成16年度の前期から試験的に1年生の5つの英語の授業でCALL教材を導入し、平成17年度には、CALL教材を使用しているクラス数も増えている。CALL教材に限らず、学校教育において教科書は、学習者にとって最大の情報源であり、そこから得られる情報は学習者の価値観や社会観、人間観などの形成に重要な役割を占める（高原 2003）。談話分析を通して解明が進んでいる表現の適切な使用法や表現方法を教科書の中の会話に応用することにより、学習者が、ターゲット言語でネイティブスピーカーとコミュニケーションをする際に、効果的に会話を進めることが可能となるのである。

言語使用に見られる男女間の違いは、音韻レベル、語彙レベル、文法レベルから談話レベルに渡るまで顕著に現われている（高原 2003）。特に1990年代の研究では、会話スタイルに根本的な男女差があるとするものが多く認められる。例えば Holmes (1992) のボライトネス・ストラテジーの研究によると、女性は男性より丁寧表現を好んで使用し、聞き手の対面（face）を脅かすような対立表現を回避する傾向がある。同様に、Tannen (1990) によると、女性は、会話をする際、親愛感や感情の触れ合いを大切にする。その為、話し相手との共通点を見だし、信頼関係を築くことを会話の目的とし、自分の意見を強く主張したり、相手と衝突したりすることを回避するという協調的対話の方法をとる傾向がある。一方、男性は、会話の際に地位の上下を大切にする。その為、自分の持っている知識や技術を相手に示すことを会話の目的とし、相手に命令したり、反対したりする競争的対話の方法をとる傾向がある。対立表現の方法に関しても男女間の違いが報告されており（Pilkington 1979; Kyratzis

& Guo 1996)、男性は断定的な言い切りの反対表現を用いるが、女性は、直接的な言い方を避け、曖昧にぼかすという手段を用いる傾向がある。

こういった英語の使用における男女差を英語の教科書に应用することは、ことばの使用法を学習するために極めて重要なことである。しかし、日本での英語教材とジェンダーに関する研究は、主に、男女が職業や役割などといった点でどのように取り扱われているかということを中心に論議されており、語用論レベルでの研究はほとんどされていないのが現状であり、まだまだ検討の余地が残されている(高原 2003)。このような課題をふまえ、本研究では、本学で使用されているCALL教材にみられる対立の発話の男女差を調べ、言語使用と性差に関する従来の研究結果と比較分析する。

## 2. 分析方法

本研究のデータとしては、本学で導入されているCALL教材のうち、リスニング及びスピーキング能力の向上を目指して作成された対話文を含む教材を選んだ。データとなり得るものはいろいろあるが、CALL教材は最新のものが揃っており、本学ではその使用率が次第に高くなることが見込まれるからである。本研究で分析の対象とするのは、次の4つの教材である。

1. 「初級・中級コース：リスニング力強化コース」 (アルク社)
2. 「スタンダードコース：リスニング力強化コース」 (アルク社)
3. 「すぐに使える日常会話」 (内田洋行社)
4. 「スタディ・アブロード」 (内田洋行社)

これらの教材はいずれも大学生向けの教材で、中学校、高等学校通して6年間の英語学習経験があり、基礎的コミュニケーション運用の為の文法知識があるという前提のもとに作成されている。「初級・中級コース：リスニング力強化コース」は、初級から中級レベルの学習者が対象で、20ユニットから構成されている。そのなかの14ユニットは会話文から成っており、いずれも社交、ビジネス、大学といった状況での、2人の男女間の会話文となっている。「スタンダードコース：リスニング力強化コース」は、初級から上級に渡る広範囲のレベルの学習者が対象で、難易度が5段階で示された50のユニットから構成されている。そのうち15ユニットが、ビジネス、大学、旅行といった場面における会話文で、そのうち1つの

ユニットが男性同士の会話文であり、それ以外の14ユニットが、2人の男女間の会話文となっている。「すぐに使える日常会話」は、初級、中級レベルの学習者が対象で、30ユニットで構成されていて、社交、買い物、旅行といった日常的な場面における2人の男女間の会話文から成っている。「スタディ・アブロード」は、中級から上級レベルの学習者が対象で、21ユニットから構成されている。そのうち18ユニットが、アメリカで留学している日本人女子大学生と米在住のアメリカ人男子大学生との会話を中心とした会話文となっている。

### 3. データ分析

本研究での対立の発話行為は、Kyratzis & Guo (1996) による対立表現の定義に基づき、断り、拒否、非難、咎めなどを含む、相手の意見や議題に対する相違を示すあらゆる発言として広範囲に定義された。これらの発話行為は、さらに、Stubbe (1991) による対立意見の区分に基づき、直接的な対立の発話 (direct disagreement=DD) と間接的な対立の発話 (mitigated disagreement=MD) に分類された。DDは、発話を和らげるような修飾表現を除く、明確で断定的な対立表現から成っている。これらの発話はさらに、命令法を含む直接的な対立の発話、否定法を含む直接的な対立の発話、侮辱的言動を含む直接的な対立の発話という、3つのDDの特徴に分類されることが判明している (河内山 2005)。

MDは、疑問形、ほかし語句といった表現と共に示された曖昧な対立表現から成っている。これらはさらに、疑問文を含む間接的な対立の発話、ほかし語句を含む間接的な対立の発話、同意の発話を含む間接的な対立の発話、理由説明を含む間接的な対立の発話、謝罪を含む間接的な対立の発話、謝意を含む間接的な対立の発話、対立の発話を抑える行為の7つのストラテジーに分類されることが明らかになっている (河内山 2005)。

上記のストラテジーをもとに、4つのCALL教材に見られた全ての対立の発話はDDとMDに定義され、さらに先述の詳細なストラテジーに分類された。

### 4. 結 果

まず、CALL教材中の対立の発話の数を調べ、MDとDDに区分した (図表1)。  
対立の発話は、「初級・中級コース：リスニング力強化コース」、「スタンダードコース：リスニング力強化コース」、「スタディ・アブロード」にはそれぞれ12回、「すぐに使える日常会話」には5回の計41回認められた。対立表現は、相互理解や問題解決のための重要なスト

図表 1. CALL教材に見られる対立の発話の種類と頻度

教科書	対立の発話 頻度 (N)	MD 頻度 (N)	DD 頻度 (N)
「初級・中級コース：リスニング力強化コース」	12	12	0
「スタンダードコース：リスニング力強化コース」	12	12	0
「すぐに使える日常会話」	5	5	0
「スタディ・アブロード」	12	11	1
合 計	41	40	1

MD = 間接的な対立の発話

DD = 直接的な対立の発話

図表 2. CALL教材に見られる対立の発話の頻度とジェンダー

教科書	F→F	F→M	M→F	M→M
「初級・中級コース：リスニング力強化コース」	0	5	6	1
「スタンダードコース：リスニング力強化コース」	0	5	7	0
「すぐに使える日常会話」	0	2	3	0
「スタディ・アブロード」	0	6	5	1
合 計	0	18	21	2

F = 女性

M = 男性

ラテジーで、欧米では幼少期からそのスキルを学んでおり、幼児の対立表現に関する研究では、対立過程で男女それぞれが異なるストラテジーを用いることが証明された (Goodwin & Goodwin 1987; Shantz 1987; Tannen 1998)。このように欧米の文化が “argument culture” (Tannen 1998) であることを考慮すると、CALL教材のなかの対立の発話の頻度は、割合としてかなり少ないと言える。対立の発話の種類を調べると、合計41回のうち、MDが40回で、DDが1回認められ、MDの頻度が圧倒的であることが明らかになった。

次に、対立の発話の使用頻度において男女差があるかどうかを探究した (図表 2)。

本データでは、男性と女性の間で交わされる会話が中心で、男性同士、女性同士の会話はほとんど用いられていなかった。その為、対立の発話も、男性から女性、女性から男性という構造が大多数を占めた。対立の発言の頻度を男女間で比較すると、女性が18回、男性が23回認められ、男性による対立の発話の頻度が女性のものをやや上回っていることから、その比

率は、実際の男女の会話における先行研究の結果と合致していることが分かった。

引き続き、対立の発話の具体的な使用状況やその頻度に男女差があるかどうか探った。本データで唯一見られたDDは、先述の3つのDDのストラテジーのうち、否定的表現を用いるものであった。以下にその具体例が示されている。

#### 4.1 否定法を含む対立の発話

例1) John: Could I go back to Tokyo by train tomorrow? (男性)

Doctor: That's out of the question. (男性)

上に見られるのは、医者と患者である男性同士の対話であり、医者が“out of”という否定にあたる表現を用いて患者であるJohnの願いをきっぱりと否定していることが示されている。

次に、MDを先述の7つのMDのストラテジーにあてはめていき、その使用頻度に男女差があるかどうか調べた。データ中の対立の発話に関しては、1回の発話の中に1つ以上の対立ストラテジーが認められることが多かった為、ストラテジーの総数は、対立の発話の総数を上回ることが明らかになった(図表3)。

7つのMDストラテジーにあてはめると、カテゴリー間で、その使用回数に著しい差があることが明らかになった。理由説明を含むMDが最も頻繁に使用されていたストラテジーで

図表3. CALL教材に見られるMDストラテジーとジェンダー

MDストラテジー	F→F 頻度 (N)	F→M 頻度 (N)	M→F 頻度 (N)	M→M 頻度 (N)	合計 頻度 (N)
疑問文を含むMD	0	11	6	0	17
ほかし語句を含むMD	0	7	16	0	23
同意の発話を含むMD	0	4	2	0	6
理由説明を含むMD	0	11	17	1	29
謝罪を含むMD	0	0	2	0	2
謝意を含むMD	0	1	1	0	2
対立の発話を抑える行為	0	0	0	0	0
合 計	0	34	44	1	79

MD = 間接的な対立の発話  
F = 女性 M = 男性

(29回)、次にばかりし語句を含むMD (23回)、疑問文を含むMD (17回)、同意の発話を含むMD (6回) のストラテジーという順で認められた。謝罪を含むMDと謝意を含むMDは極端に少なく、それぞれ2回のみ使用された。対立の発話を抑える行為というのは沈黙で表されるものだが、本データには全く認められなかった。

男女差に関しては、女性の対立のMDストラテジーは計34回であったのに対し、男性の場合は計45回となり、その頻度は女性を大きく上回ったことが明らかになった。欧米の先行研究では、女性は男性より多様なストラテジーを用いて、反対意見の効果を軽減する傾向があることが、度々示されている (Holmes 1995; Kyratzis & Guo 1996)。このことから、CALL教材の中の対立のストラテジー使用における男女差は、先行研究の結果と一致しないことが明らかになった。

次に、教材に見られた男女によるMDストラテジーの具体例をそれぞれ項目ごとに見てゆき、その特徴を考察する。男女の発話ともに最も頻繁に見られたMDストラテジーは理由、説明を含むMDであり、女性の発話には11回、男性の発話には18回認められた。

#### 4.2 理由説明を含む対立の発話

例2) A: Are you coming to the office party after work? (男性)

B: Nope. I plan to go home at exactly five, just like every day. (女性)

例3) A: When did you become such a big supporter of Maria's? (女性)

B: Look, I just think it's important to have someone who speaks her mind as project chief, and Maria will certainly do that. (男性)

例2は「初級・中級コース：リスニング力強化コース」からの抜粋である。ここでは、会社の同僚同士が仕事の後のパーティについて会話をしており、Bの女性がAの男性からのパーティへの誘いを断っている場面である。この場合のBによる対立の発話では、Nopeという断定的な否定の後にその理由、説明が見られる (I plan to go home at exactly five, just like every day.)。これは、Dunn (1996) によって、自身の利益、目的のための理由づけ、と定義されているものである。例3は「スタンダードコース：リスニング力強化コース」からの会話の一部であり、会社の同僚同士がプロジェクトチーフに関する相反する意見を述べている場面である。Aが女性による発話で、Bが男性による発話である。Bの発話に見られる理由、説明 (I just think it's important to have someone who speaks her mind as project

chief, and Maria will certainly do that) は、聞き手や第三者の興味、必要性や利益を考慮した理由づけ (Dunn 1996) といわれるもので、例 1 の理由づけと区別されている。

理由、説明を含むMDと並んで多く女性の発話に認められたストラテジーは、疑問文を含むMDであり、女性により11回使用されているが、男性による使用回数はその半数の6回であった。

#### 4.3 疑問文を含む対立の発話

例 4) A : I'm very happy, but I can't say yes or no right away. I must think about it first. (女性)

B : Why can't you make up your mind now ? (男性)

例 5) A : Come on, Sandy. You're exaggerating. She has a strong will, but I don't think she's bossy. And as for criticizing people, well, usually it's constructive criticism. I think she'll be an excellent project chief. (男性)

B : When did you become such a big supporter of Maria's ? (女性)

例 4 の会話文は、「スタディ・アブロード」からの抜粋で、B の男性からの結婚の申し込みに、A の女性が返事をしている場面である。ここでは、A の発話に対し B が自身の否定的な意見を疑問形の文章で示している (Why can't you make up your mind now ?)。例 5 は例 3 と同様のユニットからの抜粋であり、例 3 のすぐ前の会話文となっている。互いにプロジェクトチーフに関する異なる意見を主張しており、B は疑問文を用いている (When did you become such a big supporter of Maria's ?)。このような疑問文によって反対意見の語調を弱めるという方法は、英語話者の対話表現に頻繁に見られ、ポライトネス・ストラテジーの一つだとみなされており、話者と聞き手の対面 (face) を保つ為に効果的な方法であると報告されている (Tannen 1996)。

男性によるMDストラテジーで2番目に多く見られたものは、ほかし語句を含むMDである。ほかし語句は英語でhedgeと言い、maybeといった修飾語やI think、I guessといった接頭語、接尾語や、その他に付加疑問文などがある。ほかし語句は、男性の発話に16回見られたが、女性の発話には7回と、著しい男女差が認められた。

#### 4. 4 ぼかし語句を含む対立の発話

例6) A : The contract proposal you gave me mentions that you want to start production at the end of February. We'd like to begin receiving shipments by mid-January, if possible. (女性)

B : I'm afraid that's impossible, but I'll ask the plant manager if we can move up the initial shipment date by one or two weeks. (男性)

例7) A : Oh, it's raining. Bad weather, isn't it? (女性)

B : I don't think so. (男性)

例6は、「スタンダードコース：リスニング力強化コース」からのビジネスに関する会話文で、会社の上司と部下が取引の日程調整をしているという場面である。Aの女性が上司であり、その要望をBの男性部下がぼかし語句とともに断っている (I'm afraid that's impossible)。断りの表現が断定的になるところを、ぼかし語句 *I'm afraid* の使用が回避していることが分かる。例7は、「すぐに使える日常会話」の会話文で、Aの女性とBの男性が天気の話をしている場面である。この場合も、男性が *I don't think* というぼかし語句を使用することで、Aと対立する意見を和らげている。英語話者の会話では、女性はぼかし語句を多用するが、男性はまれにしか使わないという結果が多く報告されている (Poynton 1989)。このことから、ぼかし語句の使用頻度における男女差は、従来の研究結果と一致しえないと言える。

あまり多くはないが、次に見られたMDストラテジーは、同意の発話を含むMDで、女性の発話には4回、男性の場合は2回認められた。

#### 4. 5 同意の発話を含む対立の発話

例8) A : That's quite all right. Would you like to get together on another day? (男性)

B : Yes, but I'm afraid I have to leave tomorrow on a two-week business trip.  
(女性)

例9) A : I don't think it makes any difference if it is international marriage or not.

(男性)

B : Personally, I think so too. But we Japanese think carefully about the feelings of our parents. (女性)



例8は「スタンダードコース：リスニング力強化コース」からのビジネスの題材の会話文で、異なる会社の男女が、仕事上のアポイントメントの日程を調整しているという場面である。Aの男性の提案を断る際にBの女性はYesと言って先ず同意し、次に断りの発言を持ってくる (but I'm afraid I have to leave tomorrow on a two-week business trip.)。例9の会話文は「スタディ・アブロード」から抜粋した恋人同士の会話である。ここでは、アメリカ人男性Aと日本人女性が国際結婚に関する意見を述べ合っている。ここでも最初に *I think so too* というふうに同意を示す表現を用いて、直ぐ後に対立する意見を述べている (But we Japanese think carefully about the feelings of our parents.)。Kotthoff (1993) は、このようなストラテジーを “yes, but strategy” と呼んでおり、この場合yesで示される賛成は同意とはみなされず、but以下の文に示される意見の相違を表明するための前置きとして考えられる。

次に、謝意を含むMDは、男女の発話にそれぞれ1回のみ見られた。

#### 4.6 謝意を含む対立の発話

例10) A : This weekend. Why don't you join us ? (女性)

B : I'm sorry, but I can't. Thanks anyway. (男性)

例11) A : Oh, come on. It'll be fun. We had a great time at the last one. (男性)

B : No thanks. I have to get dinner ready for my kids. (女性)

例10は「すぐに使える日常会話」からの会話文で、Bの男性がAの女性からピクニックに誘われ、断っている場面である。断りの発言をした直後に *Thanks anyway* と謝意を表す表現を用いることによって、対立の立場を回避しようとしていることがわかる。例11は、「初級・中級コース：リスニング力強化コース」の中の会話文で、状況は例10と類似しており、Aの女性が同僚のBの男性からパーティに誘われ、断っているという場面である。この場合の *No thanks* はレトリックとして用いられているが、Noと直接的に答える場合よりも協調的になるという点から、間接的対立の発話であると言える。ポライトネス・ストラテジーによると、謝意を示すことは、聞き手の、他人から良く見られたいという対面である積極的対面 (positive face) を考慮することになる (Goffman 1967)。同時に、対面を脅かす行為である face-threatening acts を軽減することにもなるので、他人から邪魔されたくない、侵害されることなく自分の思うままに行動したいという消極的対面 (negative face) を守る行為

でもある (Brown & Levinson 1987)。

最後に、謝罪を含む対立の発話は、男性のMDには2度見られたが、女性の発話には全く見られなかった。

#### 4.7 謝罪を含む対立の発話

例12) A : This weekend. Why don't you join us? (女性)

B : I'm sorry, but I can't. Thanks anyway. (男性)

例13) A : I'm fine, thank you. Um ... Mr. Costas, I was wondering if it would be possible for us to get together for lunch tomorrow to discuss the matter I mentioned to you yesterday. (女性)

B : Sure-oh, wait. I'm terribly sorry, but I have to go to our company's factory tomorrow. (男性)

例12に示された会話文は謝意を含む対立の発言である例10と同様のものである。ここでは、謝意を表す発言と併用して、謝罪を表す表現 (I'm sorry) も使われており、間接的な効果を助長させていることが分かる。例13は「スタンダードコース：リスニング力強化コース」からの抜粋で、ビジネス上の会話文である。異なる会社の男女が仕事上の打ち合わせをする為に日程を調整している場面が描かれており、Aの女性の提案をBの男性が謝罪を述べて断っている (I'm terribly sorry)。ここでは、謝罪が、*but* 以下の理由説明 (I have to go to our company's factory tomorrow.) とともに使われており、例12同様、複数のストラテジーが効果的に作用していることが分かる。Holmes (1995) によるポライトネス・ストラテジーの説明によると、謝罪は、他人から邪魔されたくないという消極的対面 (negative face) を守るストラテジーであり、対面を脅かす行為であるface-threatening actsを軽減する行為である。

以上の分析結果をまとめると、本データで用いられたCALL教材では、英語話者の特徴である対立の発話があまり頻繁に扱われていないことが明らかになった。CALL教材における対立の発話の頻度に関する男女差を調べると、男性は女性に比べて対立の発話を多用するという先行研究と一致していることが分かった。詳細に対立の発話の種類を探っていくと、DDは1回のみ見られただけでそれ以外は全てMDが用いられていた。MDをストラテジー別に調べると、理由説明を含むMD、ほかし語句を含むMD、疑問文を含むMD、同意の発話

を含むMD、謝罪を含むMD、謝意を含むMDという頻度の順で認められた。それぞれの頻度には偏りがあることも明らかになった。さらに、MDストラテジーの使用頻度における男女差を調べると、男性の発話には女性と比べて多くのストラテジーが見られた為、女性が男性と比べて広範囲のMDストラテジーを使用するという先行研究と合致していないことが判明した。各ストラテジーの使用頻度における男女差探ると、疑問文を含むMD、ほかし語句を含むMD、及び、理由説明を含むMDにおいて著しい男女差が認められた。なかでも、ほかし語句の使用頻度に関しては、女性が男性より多用するという先行研究の結果を反映しておらず、女性の発話に、男性の場合と比べて多く見られた。

## 5. 結 論

以上の分析の結果、日本のCALL英語教材中の男女の会話は、欧米の談話分析で得られた会話ストラテジーの応用が行われている部分もあったが、そうでない部分も多く認められた。言い換えると、談話分析の成果がまだ完全に活かされていないと言える。今後、談話分析により解明されている知識を英語教材に応用して、英語表現の適切な使用法や効果を教授可能にすることが重要な課題である。

本研究は、異文化におけるあらゆるテキストに現われる男女間の類似点、相違点を探求する研究のほんの一端に過ぎない。今後、研究を発展させる為、多くの課題が残されていることも、この研究から明らかになった。課題の一つとして挙げられることは、教材に登場する人物や背景をより詳細に記述した上で、男女の会話の違いを分析することである。本データでは、テキスト中の会話場面が、会社、社交、旅先、学校と多様であり、さらに会話を成立させている男女の関係も、同僚、恋人、友人、上司と部下というように様々なものが混在していた。その他に、その人物背景が不明な場合もあった。コミュニケーションは言語の本質の重要な一面であるので、使用者である人間とそれを取り巻く環境を無視しては、言語の解明はあり得ない。会話スタイルの選択と話し手の性別の関係は複雑であり、実際、女性も男性も時と場合によって会話スタイルを使い分けているという研究結果も報告されている（メイナード 2001；河内山 2005）。談話分析の目的は、ことばがどのような場面でいかに用いられ、その結果どのような効果をもたらしたということ、を、できるだけ詳細に記述し、その上で人間と社会や文化の関わりを探求、解明することである（興儀 2003）。

さらに、本分析では、前提とする実際の会話を先行研究に頼ったが、分析結果は、前提とする言語資料によって変ることがあり、正確な言語資料の収集と記述は不可欠である（Judd

1993)。英語教育に会話分析を応用するにあたり、実際にデータを収集し、丁寧に注意深く考察していくことが重要になってくる。

その他の課題として挙げられることは、対立のストラテジーだけでなくその他の会話スタイルと話し手、聞き手の性別との関係を探ることや、教材を製作した筆者や編集者の人達の性別に目を向けることである。信頼できる結論に至る為に、更なる研究を重ねていくことが必要である。

## 参考文献

- Brown, P. & Levinson, S.C. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. 1987.
- Dunn, J. "Arguing with siblings, friends, and mothers: Developments in relationships and understandings." In D.I. Slobin, J. Gerhardt, A. Kyratzis, & J. Guo eds., *Social interaction, social context, and language: Essays in honor of Susan Ervin-Tripp*. Mahwah, NJ: Lawrence Earlbaum Associates. 1996. 191-204.
- Goffman, E. *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Garden City. 1967.
- Goodwin, M.H. & Goodwin, C. "Children's arguing." In S.U. Philips, S. Steele, & C. Tanz eds., *Language, gender and sex in comparative perspective*. Cambridge: Cambridge University Press. 1987. 200-248.
- Holmes, J. *Women, men and politeness*. New York: Longman. 1995.
- Judd, E.L. "The problem of applying sociolinguistic finding to TESOL: The case of male/female language." In N. Wolfson & E.L. Judd eds., *Sociolinguistics and language acquisition: Series on issues in second language research*. Mahwah, NJ: Lawrence Earlbaum Associates. 1983. 234-241.
- Kotthoff, H. "Disagreement and concession in disputes: On the context sensitivity of preference structures." *Language in society*, 22. 1993. 193-216.
- Kyratzis, A. & Guo, J. "'Separate worlds for girls and boys'? Views from U.S. and Chinese mixed-sex friendship groups." In D.I. Slobin, J. Gerhardt, A. Kyratzis, & J. Guo eds., *Social interaction, social context, and language: Essays in honor of Susan Ervin-Tripp*. Mahwah, NJ: Lawrence Earlbaum Associates. 1996. 555-577.

- Pilkington, J. " 'Don't try to make out that I'm nice!' The different strategies women and men use when gossiping." *Wellington working papers in linguistics*, 5. 1992. 37-60.
- Poynton, C. *Language and gender: making the difference*. Oxford: Oxford University Press. 1989.
- Shantz, C.U. Conflicts between children. *Child development*, 58. 1987. 283-305.
- Stubbe, M. *Talking at cross-purposes: The effect of gender on New Zealand primary schoolchildren's interaction strategies in pair discussions*. Wellington: Victoria University. 1991.
- Tannen, D. *You just don't understand: Women and men in conversation*. New York: Ballentine. 1990.
- Tannen, D. *Gender and discourse*. New York: Oxford University Press. 1996.
- Tannen, D. *The argument culture: Stopping America's war of words*. New York: Ballentine. 1998.
- 興儀峰奈子「会話分析」山内進編『言語教育学入門』東京：大修館、2003、pp. 82-109。
- 河内山有佐「対立場面における日英語の相違——日本人大学生の男女の場合」日英言語文化研究会編『日英語の比較——発想、背景、文化』東京：三修社、2005、pp. 15-22。
- 泉子・K・メイナード『談話分析の可能性——理論、方法、日本語の表現性』東京：くろしお、2001。
- 高原綾子「言語とジェンダー」山内進編『言語教育学入門』東京：大修館、2003、pp. 110-129。